



## 第24-3号

### 米銀の収益動向

#### ～本業へ回帰する収益構造～

#### 【はじめに】

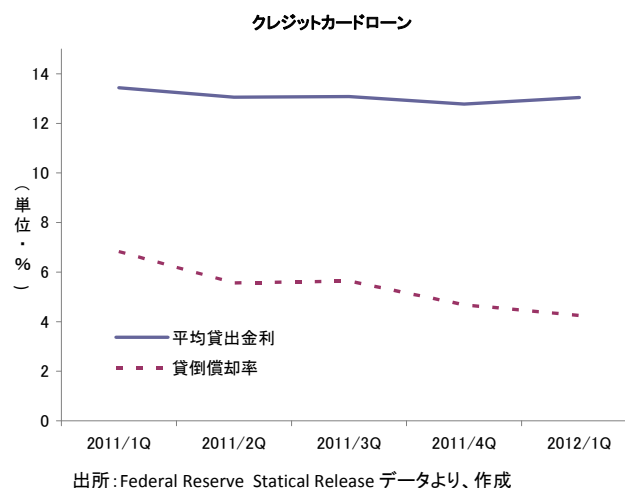
7月中旬、米銀大手行の第2四半期決算が出そろった。大手3行（JPモルガン・チェース、シティ、バンク・オブ・アメリカ）合計で103億ドル（約8,130億円<sup>1</sup>）の純利益を確保した。米国景気が伸び悩む中、大幅増益とはいかないものの、底堅く収益を確保している米銀の収益構造の背景を探りたい。

#### 【低下する資金調達コスト】

米銀の収益が底堅い背景として、一つは資金調達コストが大幅に低下していることがあげられる。小切手の決済、公共料金の支払いなどに使われるチェックングアカウントと呼ばれる決済性預金は一般的に付利されない。商業銀行の預金残高の約4分の1<sup>2</sup>は、こうした付利されない預金であり、これまでも米銀の収益を下支えしてきたが、ここもとの低金利政策を反映して付利預金の金利も低下しており、セービングアカウントなど資金移動に若干の制限がある流動性預金の預金利率は0.05%まで低下、定期預金金利も1年物CD（譲渡性預金）で、0.25%程度にまで低下している<sup>3</sup>。

#### 【消費者金融業務】

米国の商業銀行では、クレジットカードローン、自動車ローン、学資ローンなどの消費者金融を主力業務としていることが多い。これらのうち、特にクレジットカードローン業務の収益性が改善している。大手行が主な対象としているプライムと呼ばれる信用履歴の高い顧客層向けの貸出金利は13～14%と高止まりする一方で、信用コストは低下基調を維持しており、貸倒償却率は4.25%にまで低下した。



こうした環境を背景に、JPモルガン・チェースでは、2012年第2四半期当期利益の約2割にあたる1,030百万ドル（約814億円）を消費者金融部門で稼ぎ出している。

<sup>1</sup> 1米ドル=79円で換算（以下同様）

<sup>2</sup> FDIC Statics on Depository Institutions Report

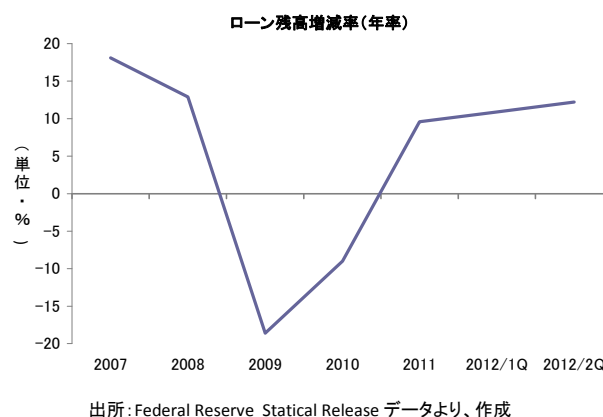
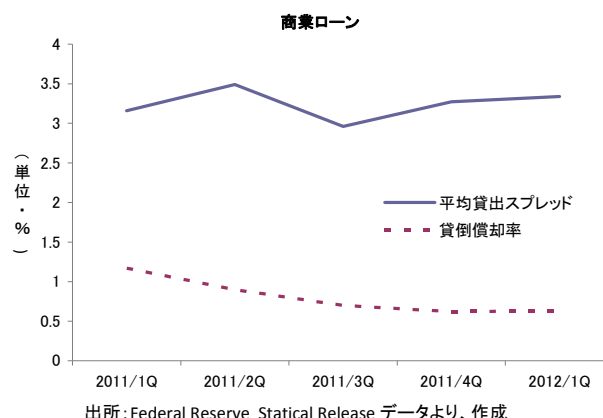
<sup>3</sup> JPモルガン・チェース銀行ホームページ（1年物CD金利は、預入額1,000ドル以上10,000ドル未満の場合）

【堅調な企業向け貸出】

伝統的な企業向け貸出業務も、収益貢献が大きい業務である。2012年3月末の平均貸出スプレッドは、前期比0.07ポイント増加し、3.34%となった。100万ドル（約79百万円）以上の大口貸出においても3.11%とかなり厚いスプレッドが確保されている。

一方、リーマンショック直後に急増した企業の倒産件数は収束しつつあり、直近の貸倒償却率はわずか0.63%に止まっている。

米国企業は、リーマンショックの直後に大規模なリストラを行ったあと、現在、事業規模の再拡大に入っている。米銀の貸出残高も2009年、2010年に減少したあと、2011年からは反転し、現在も増加基調が続いている。直近のFRBの貸出動向調査をみると、企業からの貸出ニーズが強いとの回答は43%に上り、当面は貸出残高の回復傾向が続くそうだ。



【おわりに】

リーマンショックに至るまでの世界的な信用拡張とその後発生した信用バブル崩壊に対する反省から、米国金融規制改革法（ドッド・フランク法）やバーゼルⅢの導入にみられるように、金融機関による過度なリスクテイクを規制していこうという流れにある。これまで大手行の収益の柱であった投資銀行部門、自己勘定による投資などの業務は縮小を余儀なくされるものの、資金調達コストの低位安定、貸出ボリュームの確保と厚いスプレッドによって、伝統的な預金・貸出業務を収益の柱とする流れはしばらく続きそうだ。

以上

執筆：信金中央金庫 ニューヨーク駐在員事務所 (2012.8.6)

（本レポートは、情報提供のみを目的とした標記時点における当事務所の意見です。投資等に関する最終決定は、ご自身の判断でなさるようお願いいたします。また当事務所が信頼できると考える情報源から得た各種データなどに基づいてこの資料は作成されていますが、その情報の正確性および完全性について当事務所が保証するものではありません。加えて、この資料に記載された当事務所の意見ならびに予測は、予告なしに変更することがありますのでご注意ください。）

信金中央金庫 ニューヨーク駐在員事務所 TEL (国番号1) -212-642-4700